

先日おこなわれた台湾の高等公務員試験に、「台湾語の問題が登場した。台湾語というのは通常、閩南ミンナン語、すなわち福建省南部の方言を指す。ところが、台湾の公用語は北京語になっていて、公の場での会話や記録公的な試験はすべて北京語でおこなわれていることから、とつぜん「奇問」の出現に人びとは驚いた。



ちの70パーセントの住民は、300年ほど前から台湾に渡来してきた福建人の子孫で、かれらは閩南語を母語としている。台湾には、母語と国語のねじれ現象があるのである。

李登輝前総統が、進めた開放民主化は、「台湾化」という特殊な作用をもなった。母語教育が義務化され、台湾史の学習が奨励され、現在の陳水扁政権は、その路線を踏襲している。

公務員試験にとつぜん登場した「台湾語」についての設問は、そうした流れからすれば、当然のものとみることもできるが、実は、台湾には、実に十数個もの母語、すなわち民族が存在する。

「閩南人」「台湾人」「閩南語」「台湾語」といった図式は、多数派の独善と映り、マイノリティからは警戒されている。そこに登場した、閩南語に関わる出題に、客家人、原住民などから、大きな抗議の声があがったのは当然だ。結局政府は、それを受けて、採点の対象としないことに決した。

第十四回 彷徨える アイデンティティ

柳本通彦

さらに、新しい歴史の教科書案で、中国史が世界史に組み入れられていることにも、不快感を表明する声があいついでいる。台湾の認識をめぐる対立はますます先鋭化しているとも言えよう。

なにゆえに、いま？ という素朴な疑問である。彼らは、みな台湾とは全く縁のない生活を送っていたからである。

話は変わるが、同じころ、この九月末

台湾人となすか。

やなぎもと・みちひこ 京都市生まれ、著書に「台湾先住民・山の女たちの聖歌 現代書館」、「台湾革命 集英社新書」など。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

しかし、例えば台湾の動植物の世界に分け入る際、その案内役はやはり日本語やオランダ語という異民族の文献に頼らざるを得ないのだ。3組を招待した、林業試験所の人たちにとって、台湾に植物学を立ち上げた田代、早田、金平という3人の名前は、巨大な塔のごとくそびえ立っているという。

台湾の万象をたどっていくと、どうしても、中国あるいは日本にたどり着いてしまう。この迷路をどう潜り抜けて、2300万人がいちように納得のいく形で、自己のアイデンティティの実体にたどり着くのであろうか。人びとの試行錯誤はまだ霧の中をさまよっている。



記念植樹を終えた金林業試験所長と日本人植物学者の子孫たち